百草園にある二つの句碑から
～青木角蔵・三堀武蔵とデローロ商会～

秦　哲子（日野市ふるさと文化財課）

１　青木角蔵と百草園

市域百草出身で、横浜の生糸貿易商であった青木角蔵は、廃仏毀釈下で衰微した故郷の古刹松連寺の跡を整備し、明治 20 年（1887）4 月に百草園として開園した。

眼下に多摩川、遠くに名だたる山々を眺めることができる同地は、風光明媚な場所として江戸時代には多くの文人墨客が訪れ、その様は「松連寺八景」「松連寺十二景」「松連寺十八景」等の刷り物も出ていた程であった。

百草園開園に先立ち、同年 3 月に「華見塚」がたてられた。これは、寺内にかってあった「月見塚」という芭蕉句碑に倣ってたてられたものである。

青木角蔵家墓地にある三堀武蔵（月華）の句碑

「華見塚」をたてたのは、横浜の三堀武蔵（俳号月華）であった。「月華」の名は、青木角蔵家墓地（注１）にある句碑にも見られる。句碑には「世を管と　悟ればやすし　前おくり　月華／明治庚子春日　三堀武蔵　樹之」（注 2）（注 3）とあり、明治 32 年 3 月に妻、10 月に長女を亡くし、わずか半年で二人を見送った角蔵の深い悲しみを、三堀武蔵が詠んだものである。明治 33 年（明治庚子）3 月という年代から、青木角蔵が横浜久保山墓地に青木家先祖代々の墓を建立した時期にたてられた句碑であると考えられる（注 4）。その角蔵も、翌明治 34 年 1 月 7 日に 65 歳で亡くなった。

２　青木角蔵とデローロ商会、盟友三堀武蔵

天保 8 年（1837）百草村（日野市百草）に生まれた青木角蔵は、安政の末に横浜に移り、イタリア氏路路（デロロ）商会に入って蚕糸関係の仕事を管掌し、巨万の富を築いた（注 5）。嘉永 6 年（1853）ペリーが来航し、安政 5 年（1858）日米修好通商条約が結ばれると、翌安政 6 年 6 月に横浜が開港し、一攫千金を夢見た多くの者が横浜に向けて故郷を旅立っていった（注 6）。青木角蔵もその一人であったのだろう。

『明治三年庚午十二月　武蔵国多摩郡百草村平民族戸籍』（注 7）によれば、青木角蔵（青木宇右衛門の長男角五郎）は慶応元年（1865）2 月から「横浜表イタリア国テロシント申異人方江奉公」したとあり、同年同月、神奈川駅□兵衛の娘ひさと結婚した。

青木角蔵が奉公したデローロ商会とはどのような所であったのか。創業者イシドロ・デロー

ロはミラノ出身で、クラウディオ・ザニエルによれば、ミラノのあるイタリア・ロンバルディア地方最大の蚕種商人の一人と紹介されており、イタリア政府公式使節団よりも先んじて、1866年（慶応2）以前に日本の絹産地への違法な旅行を行い、『日本の養蚕法についての現地で行い収集した観察・・・。』(I.Dell‘Oro,Osservazioni fatte e raccolte sul luogo intorno alla maniera di coltivare il baco da seta al Giappone…,Milano 1866）という小冊子を出版したことで知られる（注8)。明治4年（1871）に出版されたイシドロ・デローロの著作『養蚕と絹：日本におけるそしてヨーロッパにおける」（注9）には、島村（群馬県伊勢崎市境島村）の地図と田島伊三郎居宅の挿絵が載っている。

青木　角蔵

明治5年（1873）には田島弥平の長女「民」が宮中養蚕に従事したが、養蚕が終わった後の5月18日、一行は品川から鉄道で横浜に行き、知り合い宅に立ち寄った後、デローロという異人の屋敷でビール等をごちそうになった旨が記されている（注10)。明治12年（1880）に島村の田島弥平らがイタリアへ蚕種売り込みに行った際は、ミラノでデローロの店を訪ね、周辺を案内されている（注11)。

明治21年(1888)に甲武鉄道取締役となり近代諸産業の実業家であった雨宮敬次郎(弘化3年、山梨県甲州市塩山牛奥生まれ）もデローロと関係があった。雨宮は甲州・信州での繭買い・生糸買い・蚕種紙商いから始まり、明治5年26歳の時に横浜に出て生糸売込問屋となった。明治9年、生糸の暴落を予知して大儲けをし、そのお金で6千円分の種紙を買ってイタリア人デローロと組んで米国に出かけ、そこから英仏経由でイタリアへ行き蚕卵紙を売ったが失敗したため、デローロから帰国費用の斡旋を受けて明治10年に帰国、その後、五代友厚に見いだされ、様々な近代事業に携わった（注12)。

このようにデローロ商会イシドロ･デローロは､外国人遊歩規程があったにもかかわらず（注13)、早くから日本内地に入り込み、蚕種や生糸に関する豊かな人脈や情報を持っていた。このような中に青木角蔵はいたのである。

デローロ商会のあった「シルク通り」には生糸を扱う商館が軒を連ねていた。デローロ商会の切石と赤煉瓦の塀は一部残り、現在、横浜市の地域登録文化財となっている（注14)。デローロ商会は横浜の蚕種・生糸輸出商社であったが屑糸の輸出も行っており、パウィエル商会、エマール商会と共に「屑物三館」と呼ばれていた（注15）（注16)。

「現今生糸屑物買入商館及び買入方番頭姓名」（年未詳）（注17）によれば、

91番館　　伊太利商　　デルオロ商会　　青木角蔵、三堀武蔵　　屑係
小林角次郎　　糸係

とあることから、青木角蔵は三堀武蔵と共にデローロ商会で屑係の番頭をしていたことがわかる。商館番頭は、館主の手代として日本商人を相手に商談取引を円滑に進める役目を果たし、給料もよく、生活も潤沢であった。番頭の服装は、ズボンに類する太目の股引をはいた横浜商人の代表的服装であったという（注18)。

三堀武蔵は上州下仁田の生まれで、早くより横浜に来て 91 番館デローロ商会に入り 53 年間勤務し、屑糸業界では名の知られた人物であった（注 19）。大正 15 年 10 月 9 日 69 歳で死亡した（注 20）。

3　『青木孝吉道中記』抜き書きにみるデローロ商会での仕事

デローロ商会での青木角蔵や弟孝吉の仕事ぶりについては、青木友弥「横浜の生糸貿易商青木角蔵と日野百草園について」（注 21）に記された『青木孝吉道中記』抜き書きで知ることができる。

天保 13 年（1842）生まれの青木孝吉は、嘉永 6 年（1853）八王子八日市の久保田方へ奉公にやられ、現在の福島県川俣・本宮・二本松・相馬・須賀川・郡山や、上州沼田・秩父地方を廻り、繭・屑物を買って八王子に送っていた。慶応 2 年（1866）独立して屑物・種紙・生糸の商売を始め、生繭を買い入れて糸を繰り、糸屑を買い集めて横浜へ出していた。明治 4 年（1871）、波止場で大怪我した兄角蔵の代理を務めるため幸吉も横浜に出た。兄角蔵は怪我が良くなると、毎日町に出て屑物を買い集めた。孝吉は糸方として生糸を買い集め、選別・荷造りして外国に送った。よく売れて利益をあげたので主人（イシドロ・デローロか）も喜び、引き続き買い取っては輸出していたという。明治 9 年、デローロ商会は 156 番地から向いの 91 番地に移った。5 月、イタリアからの電信で本年は雹のためイタリアでは養蚕が不作との情報を得、これを見たデローロは、本年は必ず生糸価格が高騰するといい、主人と角蔵と孝吉で相談して新繭を買い集めることとし、孝吉は相州へ、角蔵は信州へ買付けに行き、繭価が高騰した所ですべて処分したため莫大な利益を得た。しかし明治 17 年、孝吉は病気のためデローロ商会を退職し、小林角次郎がその後任となった（注 22）。その後も孝吉は兄角蔵と現在の福島県や山形県方面の屑物等を買い取り売却して利益を得たり損失を出したりしていたが、66 歳からは兄角蔵が整備した百草園の留守番役を務めたという（注 23）。

青木角蔵が横浜常盤町に青木商店を構えたのは明治 14 年と言われる。この時期はちょうど横浜生糸問屋が団結して「横浜聯合生糸荷預所」（頭取澁澤喜作、取締役原善三郎・茂木惣兵衛・朝吹英二・馬越恭平）を作った年である。日本生糸屑糸商人と外国人生糸屑糸商人との葛藤の中で青木角蔵は独立にふみきったのだろうか。「横浜連合生糸荷預所株主及持株」には「横浜常盤町五丁目七五番地／青木角造／（持株）1 株／（株数金高）1,000 円／（七分募集高）700 円」とあり、爽々たるメンバーの中に青木角造（蔵）も名を連ねている（注 24）。その後、青木商店は、弁天通六丁目一〇七に移った（注 25）。『青木孝吉道中記』によると、百草園開園日の明治 20 年 4 月 2・3 日には、横浜から内外の生糸商が招かれ、盛大に花火が打ち上げられたという（注 26）。

青木商店（弁天通本宅）

4　百草園にある二つの句碑が語るもの

再び百草園にある二つの句碑を見てみよう。

①華見塚（注 27）

（表面）

華見塚

はせを　しばらくは　花の上なる　月夜かな

高竹山篆額㊞㊞

薫山素水書㊞

横溝豊篆刻

（裏面）

武蔵国南多摩郡百草邨ニ松蓮寺有り、調布の玉川ニ傍て勝景佳趣言へからす、時哉、明治の始め其址廃崩して荒寂ニ就しを、此度横浜なる青木角蔵氏、園間旧里を回復し、更に百草園と号く、従来芭蕉翁の句碑ありて、月見塚といひしも終に其跡絶たりしを、余、深く嘆息し新ニ碑石を建て花見塚と称し、真形を潤色して、余の雅風子と共に千歳不朽の壮観たらしめんと云

月雲も 外にハ置かす 花見塚

在横浜　　三堀　武蔵

時明治二十年三月　　俳号　月華　建之

この碑の篆刻は横溝豊で、青木角蔵家墓地にある「青木君墓誌」を後に彫った人物である。碑裏面には、青木角蔵が旧跡を復して百草園として開き、角蔵のデローロ商会での盟友三堀武蔵（月華）が、今はなき月見塚のかわりに新たに花見塚（華見塚）をたてた経緯が述べられている。

これに合わせて、江戸時代と同じように、華見塚を中心に百草園から見える十二景に寄せられた俳句を集めた『武蔵国南多摩郡百草村百草園中十国台遠望十二景』（井上恒正コレクション）が刷られた。ここに出てくる俳人は、横浜の俳人（紫紅、芦水、梅友、木冠、左助坊、靄外、楳外、其峰、清峰、無角、萩露）が最も多く、他に神奈川県内の俳人（浦賀の極塢、上溝の松嶺）や東京の俳人（太年、朴園、等栽、素水、梅年）がみられる。信濃（其残、採堂）や大坂（鶯笠）の俳人もみられる。

②芭蕉句碑「春もやや　けしき調う　月と梅」（注 28）

（表面）

はせを

春もやや　けしき調う　月と梅

紫紅十時書㊞㊞

（裏面上段）

夜雪庵撰

此中に　花の都や　種ふくへ（注 29）　鶴山
鳥影や　樹の雪こけし　時明り　吟月
懐に　入る鳥救う　鷹野かな　不言居

十時庵撰

立たすとも　聞ゆるものを　郭公（ほととぎす）舞本
柏最（も）う　古葉の落て　衣かへ　登古
五月雨や　蛙のならふ　船の縁り　里東

鴫立庵撰

真直に　杉は伸びけり　鐘氷る　梅玉
曳あげる　船の階子（はしご）や　夕霞　雨暁
持かへた　ゆるみに啼歟　ぬくめ鳥　里暁

（裏面下段）

葉壹枚　落るかけより　秋の鐘　松頂
酔ふて寝た　顔見られけり　花明り　紫紅
虫集め　千種靡て　月最中　金羅
たたむ気も　無く黄昏て　花むしろ　月華
鶯の　声に晴行　日和かな　出月

神奈川県下　武蔵国　久良岐郡大岡村

明治二十年亥初冬　　平戸清八　建之

明治 20 年（1887）初冬には、もう一つの芭蕉句碑「春もやや　けしき調う　月と梅」が大岡村（神奈川県横浜市南区大岡）の平戸清八（出月）（注 30）によってたてられた。書は『武蔵国南多摩郡百草村百草園中十国台遠望十二景』にも出てくる横浜の十時庵紫紅である。裏面上段には、蕉風俳句の夜雪庵（鶴山・吟月・不言居）、十時庵（舞本・登古・里東）、鴫立庵（梅玉・雨暁・里暁）からそれぞれ３句づつ選ばれ、裏面下段には、各庵の宗匠である松頂（鴫立庵）・紫紅（十時庵）・金羅（夜雪庵）の句、月華（三堀武蔵）、この句会の催主である出月（平戸清八）の句が刻まれており、ここで句会を催した記念にたてられたものと考えられる。

これら百草園開園に際して句を寄せた俳人たちはどのような人々だったのであろうか。横浜で活躍した同時代の俳人に福生村出身の森田友昇がいる（注 31）。文政 12 年（1829）福生村に生まれた森田友昇（勇次郎）は、安政 6 年（1859）開店の生糸売込商元祖といわれる芝屋清五郎店の支配人を務め、維新後は南仲通り三丁目で鰹魚店を開業した（注 32）。森田友昇は横浜の俳人嘯月庵友昇として活躍し、明治 3 年（1870）序文の『高むしろ集』や明治 8 年には『横浜地名案内』を刊行、その後、明治 12 年には、星布以来、八王子を拠点としていた蕉風の名庵である松原庵四世を継いだ（注 33）。その記念に出版されたものが『浅川集』であった。『浅川集』に出てくる俳人の分布を見ると、松原庵のあった八王子を中心に、友昇の活動舞台であった横浜及びその周辺、高名な俳人が多数いた東京にも多くの接点を持っていたとの指摘がある（注 34）。

横浜石川町妙法堂で行われた「松原庵友昇・桜庵太麗追善句合」の催主は月華（三堀武蔵）であった（注 35）。友昇は横浜の生糸売込商の草分け芝屋清五郎店支配人森田勇次郎であり、月華はデローロ商会屑物買入方番頭の一人三堀武蔵であった。三堀武蔵にとって友昇は仕事においても俳句おいても師匠のような存在であったと考えられる。友昇は松原庵 4 世を継いだ後も横浜に本拠を置いた。

ここで再び百草園にある二つの句碑を見てみよう。

①華見塚の文字を書いた薫山素水（東京）は、「蕉俳位附」（注 36）上位に出てくる高名な俳人であり、『高むしろ集』や『武蔵国南多摩郡百草村百草園中十国台遠望十二景』（明治 20 年 3 月）、『浅川集』にも載り、「松原庵友昇・桜庵太麗両居士追福句合」では判者を務めている（注 37）。

②「春もやや　けしきと調う　月と梅」碑の十時庵紫紅（横浜）は、『武蔵国南多摩郡百草村百草園中十国台遠望十二景』や『浅川集』に載り、「松原庵友昇・桜庵太麗両居士追福句合」では引請役をしている。

鴫立庵雨暁と里暁（注 38）は「松原庵友昇・桜庵太麗両居士追福句合」に 6 句づつ選ばれている。

夜雪庵金羅は、『浅川集』の他、友昇の『横浜地名案内』にも出てくる。夜雪庵鶴山（鎌倉）は『松原庵友昇・桜庵太麗両居士追幅句合』に 2 句出てくる。

次に『武蔵国南多摩郡百草村百草園中十国台遠望十二景』（明治 20 年 3 月）に出てくる俳人たちを再びみてみよう。

其峰（横浜）・鶯笠（大坂）は『浅川集』（明治 13 年）に、芹舎（西京）は『高むしろ集』『浅川集』に、芦水（横浜）は『横浜地名案内』（明治 8 年）や『浅川集』『横浜伊勢崎町正観世音永代奉額』（明治 12 年）に、梅友（横浜）は『浅川集』や『横浜伊勢崎町正観世音永代奉額』に、等栽（東京）は『高むしろ集』『横浜地名案内』『浅川集』に、萩露（横浜）は『横浜伊勢崎町正観世音永代奉額』に、靄外（横浜）は『浅川集』や『松原庵友昇・桜庵太麗両居士追幅句合』（2 句）に出てくる。

木冠（横浜）は『浅川集』の他、『松原庵友昇・桜庵太麗両居士追幅句合』（明治 18 年以降）では宝笠庵木冠宗匠として撰者を務め、判者もしている。左助坊（横浜）は『横浜地名案内』『浅

『武蔵国南多摩郡百草村百草園中十国台遠望十二景』
（井上恒正コレクション）

川集』『横浜伊勢崎町正観世音永代奉額』に出ており、『松原庵友昇・桜庵太麗両居士追幅句合』では左助坊一祐宗匠として撰者を務め、判者もしている。

百草園にある2基の芭蕉句碑と『武蔵国南多摩郡百草村百草園中十国台遠望十二景』（明治20年3月）からは、三堀武蔵（月華）を始めとする、横浜を拠点に活躍した森田友昇とその俳友や弟子たちの姿が見えてくる。森田友昇は明治18年（1885）に亡くなってしまうが、百草園が開園する明治20年に生きていたら、おそらく友昇自身も百草園を訪れ、生糸貿易で成功し故郷に錦を飾った青木角蔵が見守る中、弟子の三堀武蔵（月華）らとお祝いの吟詠をしたに違いない。絹の道でつながれていた多摩地域と横浜は、文化の道でもつながれていた。

（注1）もとは横浜久保山墓地にあったが、昭和27年に多磨霊園に移された。
（注2）「日野の古文書を読む会」会長上野さだ子氏解読。
（注3）横山節「真慈悲寺・松連寺・百草、関連調査　青木角蔵について」『幻の真慈悲寺を追い求めて』、幻の真慈悲寺調査ボランティア編、日野市郷土資料館発行、平成22年3月）
（注4）「青木家先祖代々の墓」「青木家先祖脈々之墓祫祭誌」の建立年代が明治33年3月である。
（注5）青木角蔵墓地「青木君墓誌」による。
（注6）横浜開港資料館編著『横浜商人とその時代』平成6年7月20日、有隣堂）。
（注7）国文学研究資料館　富澤家文書
（注8）「絹貿易と初期の日伊交流」、 横山伊徳編『幕末維新論集7幕末維新と外交』、吉川弘文館、2001年8月
（注9）国際日本文化研究センター図書館所蔵、デジタル公開あり。
（注10）田島民著・高良留美子編『宮中養蚕日記』、株式会社ドメス出版、2009年
（注11）『島村蚕種業者の洋行日記』、境町、1988年
（注12）『開港と生糸貿易』全3巻復刻版、名著出版、昭和62年7月24日発行（藤本實也著『開港と生糸貿易』、開港と生糸貿易刊行会（横浜生糸問屋業組合内）、刀江書院、昭和14年発行の復刻版）。
（注13）神奈川県の外国人遊歩規程の東側は六郷川（多摩川）を境としていたため、日野・八王子（高月・戸吹・上一分方・元八王子・小仏）もその範囲に入っていた。
（注14）坂上克弘・伊藤泉美「旧横浜外国人居留地91番地の遺構と遺物」『横浜開港資料館紀要』第二一号、横浜開港資料館、平成15年
（注15）注11に同じ。
（注16）価格の安い屑物（生糸を作る製糸の過程で生じる屑糸や屑繭等）を原料として、短い繊維を方向を揃えて撚り合わせて糸を作ると安価な紡績絹糸となり、ドレスや靴・傘を装飾するためのベルベットやフェイクファー、クレープ（縮緬），ガーゼ、レースなどとなった。また微粒子病による生糸価格の上昇を反映して交織（生糸，絹紡糸，羊毛，亜麻，木綿）需要も増大した（井上直子「機械制絹糸紡績とファッションの民衆化 1790 － 1930 」『城西大学経済経営紀要』第36号、2018年）。
（注17）小林綾太郎著『横浜蚕糸貿易事情』、明治24年（1891）11月出版、出版者小川重五郎
（注18）『横浜市史稿』風俗編（横浜市役所編纂、昭和6年12月15日発行／株式会社臨川書店）
（注19）注11に同じ。
（注20）『大正過去帳＜物故人名辞典＞』（稲村徹元編、東京美術、昭和48年）によれば、「横

浜山下町九一番地デルオロ商会主。‥輸出くず糸界の権威‥自宅は根岸町字西竹の丸」とある。
（注 21）『郷土よこはま』第 92 号・93 号
（注 22）前述「現今生糸屑物買入商館及び買入方番頭姓名」に糸係小林角次郎とあることから、その前任者は青木角蔵の弟青木孝吉であったと考えられるが、不明。
（注 23）青木友弥「横浜の生糸貿易商　青木角蔵と日野百草園について」『郷土よこはま』第 92 号・93 号
（注 24）「横浜連合生糸荷預所株主及持株」（前掲注 10、624 頁より抄録）
原善三郎（7 株）、茂木惣兵衛（７株）、平沼専蔵（7 株）、渋沢作太郎（５株）、三井物産株式会社馬越恭平（５株）、若尾幾造（５株）、外村両平店支配人川添源次郎（５株）、貿易商会朝吹英二（5 株）、中里忠兵衛（４株）、田中平八（3 株）、堀越久三郎（3 株）、厚積組支配人上原四郎左衛門（2 株）、同伸会社高木三郎（2 株）、渡辺福三郎（2 株）、雨宮敬次郎（2 株）、川部井芳兵衛（1 株）、高橋萬右衛門（1 株）、川喜田久太夫（1 株）、扶桑会社子安峻（1 株）、鈴木宇右衛門（1 株）、荻野賢太郎（1 株）、新島金兵衛（1 株）、山田駒吉（1 株）、飯島勇造（1 株）、丸善商店笠原恵（1 株）、青木角造（1 株）、中村碌郎（1 株）
（注 25）明治 31 年 12 月版『横浜姓名録』「蚕糸売込商」に「青木商店（青木角蔵　電話なし　弁天通六丁目一〇七）とある。
（注 26）前掲注 20 に同じ。
（注 27）『日野市　百草倉沢地区　歴史散策ガイド』、真慈悲寺調査ボランティア編、日野市郷土資料館発行、平成 29 年 3 月
（注 28）前掲注 24 に同じ。
（注 29）晩秋の季語。種を採取するための瓢箪のこと。
（注 30）明治時代の県議。大岡村（横浜市南区）の代々名主家に生まれた。明治 5 年（1882）5 月県会議員に初当選し、明治 26 年（1893）12 月まで在職、明治 34 年（1901）10 月県会議員補欠選挙に当選し、翌 11 月まで務めた。根岸の川岸に醤油の醸造工場を経営していた（『神奈川県史』別編 1　人物、昭和 58 年 7 月 1 日発行、神奈川県県民部県史編集室編集、財団法人かながわ弘済会発行）。
（注 31）日野市古文書等歴史資料整理編集委員会多田仁一委員長のご教示による。
（注 32）意太田久好著、『横浜沿革誌』、明治 25 年
（注 33）安田吉人「松原庵友昇の生涯」『多摩のあゆみ』第 71 号、（財）たましん地域文化財団、平成 5 年 5 月福生市郷土資料室編『松原庵の宗匠―星布と友昇の俳諧―』、福生市教育委員会、平成 21 年
（注 34）『福生市史』上巻、福生市、平成 5 年
（注 35）「松原庵友昇・桜庵太麗両居士追福句合」、『（福生市）文化財総合調査報告書第二十五集』平成 4 年 3 月 30 日、福生市教育委員会編集・発行）
（注 36）前掲 31『（福生市）文化財総合調査報告書第二十五集』所収
（注 37）篆刻の横溝豊は、森田友昇墓碑にある横浜世話人の一人横溝豊吉と関係ある人物なのか不明。
（注 38）金沢連の梅園里暁（『横浜の俳人たち　横浜俳壇史１．江戸期』、石井光太郎著、1972 年、横浜市教育委員会）。嘯月庵友昇の『高むしろ集』にも出てくる人物である。

日野市ふるさと文化財課紀要　第１号

令和５年３月 31 日発行

編集・発行　日野市ふるさと文化財課

〒 191-0016　東京都日野市神明 4-16-1
Tel：042-583-5100　Fax：042-584-5224
Mail：bunkazai@city.hino.lg.jp